

大阪府茨木市「識字・日本語教室」 における日本語指導の現状と課題

藪 崎 淳 子

Current Status and Issues of Ibaraki city Japanese classes in Osaka Prefecture

YABUZAKI Junko

1. はじめに

大阪府茨木市には、「識字・日本語教室」（以下、「教室」とする）と呼ばれる、「よみかきに
じしんのない人」「がいこくの方でにほんごのべんきょうをしたい人」¹が無料で学べる教室が
4 か所ある。4 つの教室の概要は表 1 の通りである。

【表 1 茨木市 識字・日本語教室一覧】

場所	開講曜日・時間	2023 年度開講期間
豊川いのち・愛・ゆめセンター	火曜日 18 時～19 時 30 分 18 時 30 分～20 時 19 時～20 時 30 分	5/9～7/11 9/5～12/5 1/9～2/13
沢良宜いのち・愛・ゆめセンター	月曜日 18 時～19 時 30 分 18 時 30 分～20 時 19 時～20 時 30 分	5/15～7/24 8/14～10/30 11/6～1/29
	木曜日 10 時～12 時	5/18～7/27 8/17～10/26 11/9～1/25
総持寺いのち・愛・ゆめセンター	木曜日 18 時～19 時 30 分 18 時 30 分～20 時 19 時～20 時 30 分	5/11～7/20 9/7～12/14 1/11～2/8
中央公民館	金曜日 10 時～12 時	5/12～7/21 9/1～12/15 1/12～3/22

¹ 茨木市 HP「識字・日本語教室」参照 <https://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/kyoikuiinkaikyokusoumu/syakaikyoku/menu/shikijinihonngo/index.html>

本稿で扱うのは、表1に示した教室における日本語の非母語話者（以下、「学習者」とする）に対する日本語教育である。教室では有償のボランティア（以下、「指導者」とする）が学習者とペアになり、マンツーマンで指導を行うのを基本としている²。

本稿執筆のきっかけは、2022年11月茨木市教育委員会社会教育振興課主催の「令和4年度日本語指導者研修」において講演した際に受けた、ある指導者からの教材選定に関する質問である。その内容は、教室で小学校の国語教科書を教材として使用している指導者がいるが、学習者に対して小学校の教科書を使って指導するのは適切なのか否かという内容であった。その場では、非日本語母語話者に対する日本語教育では、小学校の国語の教科書よりも、学習者向けに作られた日本語教育の教材の方が学びやすいという趣旨の回答をした³。しかし、あとから振り返り、地域で生活する学習者の日本語学習の目的を知らない本稿執筆者の回答は果たして適切であったのかという疑問が生じた。留学生と異なり、就労者・生活者としての外国人の日本語学習目的は多様であると予想され、小学校の国語の教科書を使うことが学習者のニーズによるものであった可能性がゼロだとは言い切れないとも思われたためである。また、指導者の募集に際して日本語教育の資格や経験を問うてはいないため、指導者への説明や研修の不足が小学校の教科書を使用するに至らせた要因である可能性もある。そうであれば、使用している教材の是非を議論する前に、ボランティアで活動する指導者をサポートする方策を考えるべきであろう。

茨木市内に在住する非日本語母語話者を対象とした日本語支援に資するための第一歩を踏み出すには、同市の教室で学ぶ学習者と指導者について知り、理解を深める必要がある。本稿は表1に示した4つの教室の現状把握のための調査を行い、今後の支援のあり方について考察する。

2. 茨木市における外国人人口

2023年6月時点の茨木市の外国人人口は4362人で、外国人のみの世帯数は2707、外国人と日本人による混合世帯数は789である⁴。「茨木市住民基本台帳」をもとに、過去5年分の6月時点の人口の推移をまとめたのが、次の図1である。外国人人口及び外国人のみの世帯数は

² 1人の指導者が同時に2～3人の学習者を指導する例も見られたが、グループレッスンが行われていない。また、1人の学習者を複数の指導者が交代で担当する例もあるとのことである。なお、マンツーマンレッスンは基本のため、表1に示した開始・終了時間の中から指導者と学習者の都合に合う時間を選択して活動している。

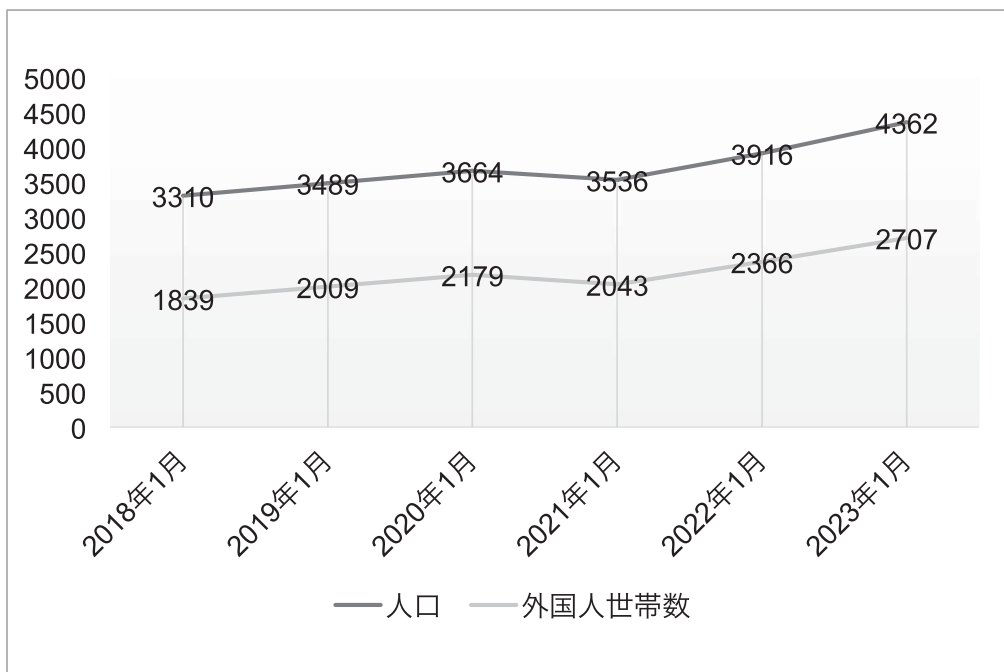
³ 例えば、動詞分類1つをとっても、日本語教育と日本語母語話者が小・中学校で学ぶ口語文法とでは差があり、口語文法の動詞分類よりも日本語教育における動詞分類の方が学習者には学びやすい。

⁴ 「茨木市住民基本台帳人口」参照

https://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/soumu/soumu/menu/tokei/ibaraki_tokei/jinko_setai/jinko_suii.html

2021年には減少している。ただ、2021年は新型コロナウイルスによる2～4回目の緊急事態宣言が発令された年であり、日本と海外の往来に制限があったことに鑑みると、総じて茨木市の外国人人口は年々増加する傾向にあると言える。また、外国人人口だけでなく、外国人世帯数が増加していることにも注目する必要があるだろう。混合世帯であれば、日本語運用能力の不足を補ってサポートできる配偶者などが身近にあり、役所での手続きや、災害・事故といった非日常的なトラブルに見舞われるなどしても、日本語の母語話者である家族に助けてもらえる可能性が高い。しかし、外国人のみの世帯では、日本語に習熟している家族が家庭にいない場合もある。もちろん、外国人だけで暮らす世帯の場合、家庭内は母語でコミュニケーションすればよく、日常生活で日本語が必要とされる場面はさほど多くはないだろう⁵。しかし、日本語での情報収集やコミュニケーションが必要とされる場面で立ち往生しないためには、一定の日本語能力が必要である⁶。

【図1 茨木市外国人人口】



⁵ 西口（2008: 28）に、現代社会の外国での暮らしにおいては日常生活に「関わる事物や物事のやり方そして道具や機械の使い方」が分かり、仕事の「具体的な作業のやり方さえ理解すれば」日本語を使わずとも暮らせる、との指摘がある。黄（2021）においても、地域日本語教室に通う外国人へのインタビューで、仕事では日本人の同僚へのあいさつ程度と仕事に関する専用の日本語を使用するに留まり、日常生活において日本語を使うチャンスが少ないという回答が得られたとの報告がある。

⁶ 「自立した言語使用者」とされる B1 レベル以上の日本語能力が必要であろう（「地域における日本語教育の在り方について（報告）」令和4年11月29日文化審議会国語分科会）。

外国人人口の中には留学目的で日本に滞在し、日々日本語教育を受けている人もいれば、長期にわたって日本で生活しており、既に高度な日本語運用能力を身に付けている人もいる。従って、この数値がそのまま茨木市において日本語学習が必要な人や、地域が日本語学習を支援しなければならない人の数ではない⁷。しかし、増加する外国人人口の中に、日本語支援が必要な人も少なからず含まれている。こうした人々の社会活動と生活を支える日本語支援の必要性は高く、その支援を必要とする人の数は今後さらに増えていくことも予想され、地域における日本語支援の実情とその課題を把握する必要がある。

3. 調査方法

2023年9月に4つの教室で活動している指導者に対して、質問紙を使用したアンケートを実施した。アンケートは本稿末尾に添付した通りである。アンケートには20代から80歳以上までの合計39人が協力して下さった。また、総持寺いのち・愛・ゆめセンター（2023年10月26日）、豊川いのち・愛・ゆめセンター（2023年10月31日）、沢良宜いのち・愛・ゆめセンター（2023年11月9日）で開かれている教室を訪問した⁸。

4. 教材について

本調査を行うきっかけともなった、指導の際に用いる教材についてアンケートで尋ねたところ、34人から回答があった。その内訳は表3の通りである。

⁷ 少し古いデータではあるが、2019年に茨木市の外国籍の方を対象にしたアンケートの調査結果報告書によると、「子どもの頃から日本語を話している」「すでに勉強が終わっている」と答え、十分に日本語が身についていると答えた人が約48%を占めている。

⁸ 沢良宜いのち・愛・ゆめセンターでは週に2回教室が開かれているが、木曜日午前の教室を訪問した。また、中央公民館については調査時期に建物の改修工事が行われていたため、訪問できなかった。

【表 3 使用教材一覧】

使用教材	使用者数	学習者のレベル ⁹
日本語能力試験の対策用テキスト	13 人	N2、N3、N4、N5
みんなの日本語（スリーエーネットワーク）	12 人	N3、N4、N5、不明
まると（三修社）	2 人	N3、N5
初級日本語文法総まとめ 20（スリーエーネットワーク）	2 人	N3、N4
NIHONGO FUN & EASY（アスク）	1 人	不明
にほんごこれだけ（ココ出版）	1 人	N5
やさしい日本語（NHK WORLD-JAPAN）	1 人	N5

日本語能力試験の過去問やその対策のための教材を用いる指導者が多く、N5 から N2 レベルの学習者に対し、それぞれのレベルに応じた教材を選択している。また、N5 から N3 レベルの学習者に対しては、市販の初級教材を用いる指導者が多く、中でも『みんなの日本語』の使用者が多い。表 3 にあげたもの以外では、新聞などのレアリア、ことわざや慣用句の本、医療や季節に関する書籍、学習者自らが書いた作文を用いているとの回答も見られた¹⁰。市販の教材を使用しない学習者は上級レベルか、日本滞在歴が 3 年以上の人が多く、教材は学習者からの希望によって選択しているとの回答がほとんどであった。講演会で指摘のあった小学校の教科書や漢字ドリルを使用しているとの回答もそれぞれ 1 件ずつあったものの、いずれも N2 の日本語能力試験対策用教材と併用されており、またそれらはいずれも学習者からの希望によって選択しているとの回答であった¹¹。本調査では学習者に対するアンケートは行っていないため、使用テキストについて学習者がどう考えているのか、またそれが学習者の目的に本当に合致していると捉えているか否かは分からない。ただ、アンケートからは、指導者が学習者の希望やレベルを考慮し、主として市販の日本語教材を用いている様子がうかがえる¹²。

⁹ 表 3 に示した学習者のレベルは、日本語能力試験のレベルに基づく。日本語能力試験はもっとも易しい N5 からもっとも難しい N1 までのレベルに分けられている。学習者のレベルについては、指導者に学習者の日本語能力がどの程度かを尋ねた結果であり、それぞれのレベルに合格していることを意味するものではない。

¹⁰ 教室訪問の際には、茨木市が製作・発行している「防災ハンドブック」を用い、英語も交えながら生活に必要な情報とその理解に必要な日本語を指導している様子も見られた。

¹¹ 小学校の教科書を使用している学習者は N3 程度で就労のために日本に滞在し、キャリアアップを目的に日本語を学習しているベトナム人で、小学校の漢字ドリルを使用している学習者は N2～N3 程度で結婚・家族の就労のために日本に滞在し、生活、仕事、地域の人とのコミュニケーションを目的に日本語を学んでいる非漢字圏の学習者である。

¹² アンケートに「この教室は学習者の個々の学習目的や要望に対して指導者がそれぞれ対応できるシステムになっており学習者には喜ばれている」との記述があり、指導者は学習者に応じた支援を行っているかと捉えていることが知れる。

5. 学習者について

今回アンケートに答えてくださった39人の指導者が担当している学習者43人について回答があった¹³。そのうち、学習者の年代、出身地、日本滞在の理由について回答があったものをまとめたのが表4である。

【表4 学習者】

		10代	20代	30代	40代	50代	60代
男性	人数	1人	9人	0人	1人	1人	0
	出身地	インドネシア	インドネシア ベトナム ミャンマー		インドネシア	インドネシア	
	滞在理由	家族の就労	就労		就労	就労	
女性	人数	0	8人	4人	9人	3人	1人
	出身地		フィリピン ベトナム	中国 フィリピン	インドネシア タイ 中国 マレーシア メキシコ	中国	中国
	滞在理由		就労、結婚	結婚、家族の 就労	就労、結婚、 家族の留学	中国残留孤児	

男性学習者は、家族の就労に伴って日本に滞在する14歳の学習者を除けば全員が就労目的で日本に来ており、20代が最も多く、いずれも東南アジア出身である。女性学習者も就労を理由に日本に滞在する20代の学習者が7人と少なくない点では男性と共通する面もあるものの、結婚によって日本に滞在する学習者も7人（20代1人、30代2人、40代4人）あり、男性学習者とは異なる背景をもつ学習者も少なくない。アジア出身の学習者が多いものの、メキシコ、ブラジル（年代不詳のため表には記載していない）出身の学習者もいるなど、男性よりは国籍や日本に滞在する理由に幅がある。滞在理由に見られる男女間の差異は、教室参加理由に見られる差異とも相関している。男性学習者の教室参加理由については「日本語力向上」のみを選択している指導者が10人と多く、「日本語力向上」に加えて「指導者との交流」を選んだ指導者は2人に留まる。また、その2人はいずれも日本滞在歴が3年以上の40代、50代男性の指導者である。また、日本語能力試験合格を目指しているとの回答も2人からあり、男性

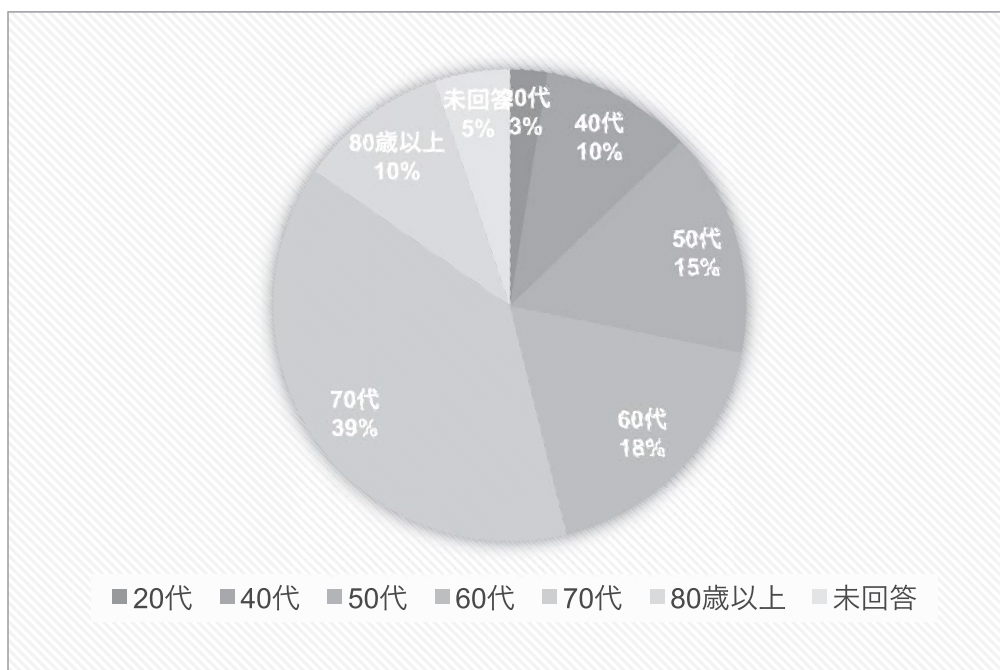
¹³ 1人で複数の学習者を支援している指導者がいるため、指導者の数よりも学習者の数が多くなっている。

学習者の教室参加は日本語力向上が主たる目的であると言えよう。一方、女性学習者については「日本語力向上」のみを選択している指導者は14人で、11人は「日本語力向上」の他、「指導者との交流」「他の学習者との交流」「地域の情報収集」なども選択している。中には「指導者との交流」のみを選択し、「日本語力向上」を選択していない指導者も1人見られ、女性学習者は単に日本語を学ぶだけではなく、交流も目的の1つとして参加していると指導者が捉えている様うかがえる。教室訪問の際には、N2に合格している学習者から、これからN3合格を目指す学習者まで、レベルの異なる3人の女性学習者に対し、1人の指導者が初級の教材を用いて教えている事例を見た。学習者3人のうち2人のレベルには合わない教材であったが、レベルの最も低い学習者を2人の学習者がサポートしながら、指導者と楽しそうに学習をしていた。こうした事例からも、女性学習者の教室参加の目的は男性学習者に比べて多様で、単純に日本語能力向上を目指して教室に参加している学習者ばかりではないことが知れる。

6. 指導者について

アンケートに回答してくれた指導者は20代から80歳以上までと幅広い年齢層にわたっている。その内訳は図2の通りであり、70代が最も大きな割合を占めている。また、在職中か否かの問いに、在職中と答えた指導者は39人中12人と3割程度に留まるところからも、退職したり、子どもが成長して手を離れたりするなどした人たちが、教室を支える大きな力となっていることが読み取れる。

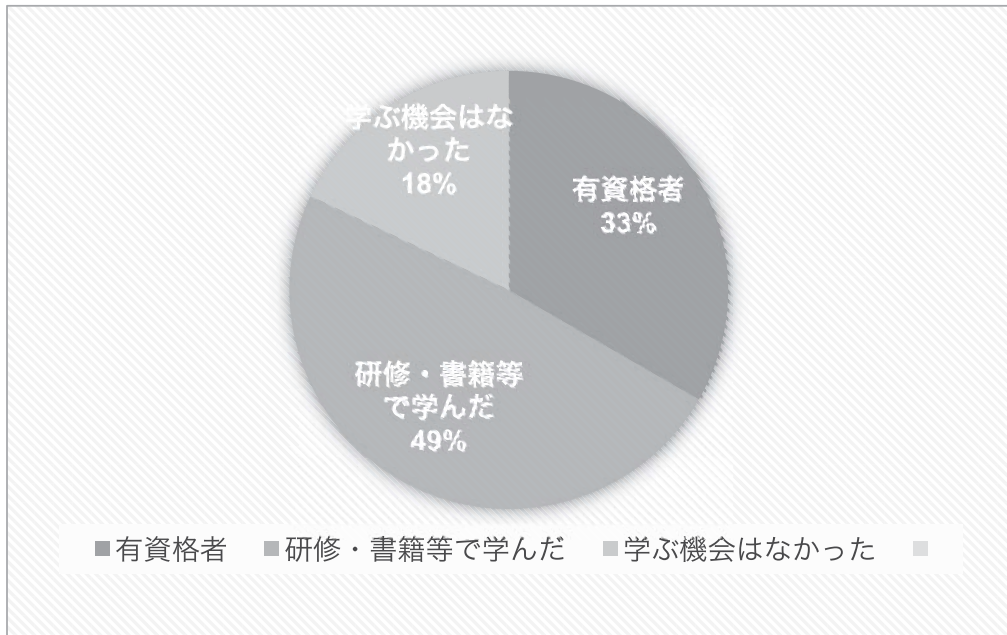
【図2 指導者の年齢構成】



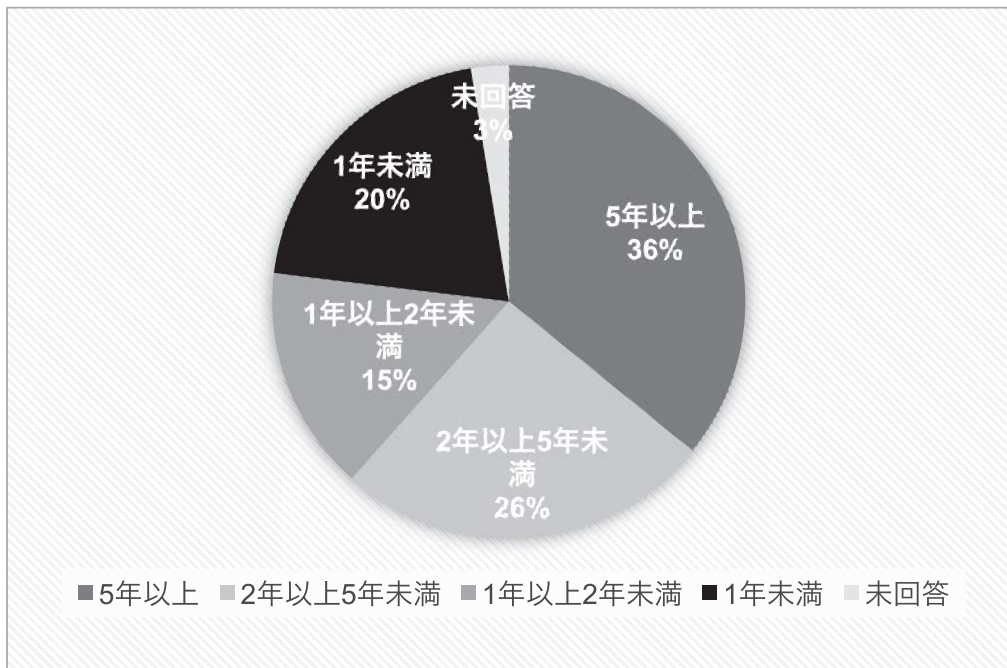
文化庁（2018: 12）に「初期日本語教育については、専門性を有していないボランティアには負担が大きい」とあり、N5 から N4 程度までの学習者の指導には、日本語教育に関する知識や経験などがあることが望ましいと言える。この点について、茨木市の教室は、図3に示したように「日本語教育能力検定試験合格」「420 時間以上の日本語教師養成研修受講」などの日本語教育に関する有資格者が3 割程度いる。また、資格は有していなくとも茨木市の教室以外の日本語教育機関で指導した経験を有するとの回答が16 人からあり、4 割を超えている¹⁴。他の教育機関で教えた経験や日本語教育に関する資格は有していなくとも、研修への参加や、書籍を通じて学ぶなど、自身で日本語教育について学んだ指導者を含めれば、8 割は日本語教育に関する知識を有している。加えて、茨木市の「識字・日本語教室」での指導歴は、図4に示したように半数以上の人々が2 年以上と答えており、経験者が多くを占めている。

¹⁴ ボランティア講師としてマンツーマンレッスンの経験がある人の他、非常勤講師としてグループレッスンを行った経験を有する人や小学校で外国ルーツの児童に日本語を教えた経験を有する人もいる。また、幼小中高の他、塾、専門学校で教壇に立っている、あるいは立ったことのある教職経験者は17 人（約 43.6%）いて、教えることに慣れている指導者が少なくない。

【図3 日本語教育に関して】



【図4 「識字・日本語教室」での指導歴】



2年以上も継続して教室に参加する指導者が少なくないことは、活動に対する満足度とも相関していると見られる。日本語支援に満足しているか否かという設問に対し、「満足している」と答えた人は8割（39人中34人）を超えており、「満足していない」と答えた人（39人中4人）を大きく上回っている。満足している点を尋ねたところ、学習者との交流に満足しているとの回答が33人と最も多く、学習者の日本語力向上が22人と続いている。日本語支援を通じて異文化交流ができること、そして自身の支援が学習者の日本語力向上につながっているという思いが、ボランティア活動を続ける原動力ともなっていると理解できる¹⁵。

7. 課題

本節ではアンケート調査、及び教室訪問から見出された課題として、教材と指導内容、そして指導者について順に述べる。

7-1 教材、及び指導内容

5節で見たように、教室に訪れる男性学習者、及び青年層の女性学習者の多くは就労のために日本に滞在し、日本語能力の向上を主たる目的とする傾向にあるのに対し、青年層を除く女性学習者の背景は多様で、日本語能力の向上以外にも、他の学習者や指導者、また地域との接点を持つための一つの場として教室を活用する学習者も見られる。こうした学習者に対して現在教室で主に用いられている教材が、日本語能力試験の対策用テキスト、あるいは初級学習者に対しては『みんなの日本語』であることは4節で見た通りである。

『みんなの日本語』は文型を積み上げていくタイプの教材で、会社員のマイク・ミラーという登場人物を中心に会話が展開され、フォーマルな場にふさわしい丁寧な言葉遣いが基本となっている。会社で上司と話すなどフォーマルな場面での日本語運用能力を身に着けたい学習者に適しており、また補助教材や教え方の手引き等、副教材が充実している点で指導者にとって教えやすい教材でもある（中山 2018）。しかし、同僚や地域の人とのインフォーマルな場面も含む会話や、地域社会で暮らしていくための日本語を身に着けたい初級の学習者にとっては、

¹⁵ このことは教室で指導をはじめたきっかけ（複数回答可）の回答にもあらわれている。きっかけとして最も多かったのは「ボランティア活動に興味があった」（21人）であるが、次いで多かったのが「外国人との交流に興味があった」（19人）である。また、外国の方にかつてお世話になった恩返しという思いで始めたという自由記述があるなど、外国人との交流に対する関心の高さが見てとれる。同設問への回答には、「知り合いに誘われた」（11人）、「新しいことを始めたかった」（11人）「生きがい・やりがいのため」（11人）の他、「日本語教育の経験を生かしたい」（10人）、「教師の経験を生かしたい」（10人）、「語学力を生かしたい」（5人）、「日本語の運用能力を生かしたい」（4人）とあり、自身の経験・能力を生かせるボランティア活動として日本語指導を捉えている様子もうかがえる。

カジュアルで親しい間柄の人との会話で用いる言葉遣いも含む教材や、タスクを中心とした教材の方が適している可能性がある。特に多様な背景を持つ女性学習者に対しては、例えばタスク先行型の教材を使用することも検討してもよいのではないだろうか。また、N2 程度の学習者には日本語能力試験の対策本などが使用される傾向にあるが、他の中級から上級レベルの教材の使用も検討されてしかるべきであろう。

教室訪問の際にインタビューをした N3 レベルの学習者は、日本滞在歴が3年で聴解能力が高い一方、発話に不自然さが目立ち、日常生活において日本語で会話をする機会が少ないように見受けられた。技能実習生は、同じ国の出身者と日常生活を共にし、日本語母語話者と日本語で会話をする機会があまりないという人が多いそうである。日本語能力試験対策のための語彙や読解、聴解などの学習ももちろん大切だが、それらのような独学できる内容よりも、学習者に発話を促す会話中心の学習への切り替えも検討し、指導者から学習者へ学習内容について提案してもよいのではないかと感じた。

もちろん、こうした教材選びや指導内容に関する責任は、地域のボランティア教室においては指導者ばかりが負うものではないとも考える。アンケートの「今後日本語支援をしていく上で必要なこと」を尋ねた設問に対し、「教具・教材の充実」との回答が15人からあり、教室に関する意見・要望を尋ねた欄にも「教材・資料 etc の充実」「IT の活用を考えてほしい」との書き込みがあった。教材の充実度は教室によって差があり、ある教室では『みんなの日本語』とその副教材、日本語能力試験の対策本と漢字のテキストのみで、指導者が多様な教材を閲覧し、選択できる状態にはなっていなかった。もちろん、教室が開かれている空間は、日本語指導のためだけに使用されているわけではなく、たくさんの教材を並べることは不可能であろうし、予算にも限りがあろう。しかし、これまで日本語教育について学ぶ機会がなく、経験のないボランティアの方にも指導者として参加してもらうためには、タイプの異なる教材を手にとれるようにすることが必要である。また教授内容について確認するための文型辞典も不可欠であろうが、訪問した教室には用意されてはいなかった。

7-2 指導者

アンケートにおいて、「今後日本語支援をしていく上で必要なこと（複数回答可）」を尋ねたところ、以下のような結果が得られた。

【表 5 今後の日本語支援に必要なこと】

日本語教育に関する知識	17 人
日本語に関する知識	14 人
教具・教材の充実	15 人
支援者同士の交流	9 人
支援者同士の勉強会	8 人
専門家による研修	9 人
学習者との学習以外の交流	7 人
特に必要ない	7 人

「教具・教材の充実」が急務であることは、7-1 に述べた通りであり、これにより日本語・日本語教育に関する知識の不足について補えるところもあろう。これらに加えて要望の多いのが指導者同士の交流であることが、「支援者同士の交流」「支援者同士の勉強会」の項目にあらわれている。アンケートで改善点、意見・要望を尋ねた欄に、他の指導者との交流が必要だと答えた指導者もある。また、自由記述欄からは、学習者との相性に悩むも周囲に相談できずにいる指導者がいることが分かったり、他の指導者が学習者のニーズに合わない指導をしていると、他の指導者に対する批判的な目もあることが分かったりもした。

教室では学習者と指導者の都合に合わせて学習が開始・終了し、また学習スペース確保のために複数の部屋に分かれて指導を行うために、全員が一堂に会する機会はない。また、限られた時間でそれぞれ熱心に指導を行うため、指導者同士で会話をする時間的な余裕もなく、互いに顔見知りであろうと見られる指導者が学習の前後に会話を交わす様子がわずかに見られた程度であった¹⁶。

図 3 に示したように、教室には日本語教育に関する有資格者が 3 割程度を占めている。指導者が必要だと考える「日本語教育に関する知識」「日本語に関する知識」を有している人が、実は身近にいるにもかかわらず、それが活かされていない状況にある。ボランティアの指導者を、指導以外の時間に集めるということは難しかろうが、指導者ミーティングという形で 1 学期の初回授業開始前に 20 分でも 30 分でもコミュニケーションをとることができれば、分からないことや、困ったことなどを相談したり、また指導内容等について意見を交換したりしやすい雰囲気が醸成できるのではないだろうか。

また、指導者の年齢層の偏りも課題として指摘することができる。高崎（2002）は「シニア世代のボランティア教師は、それまでの所属社会での影響を大きく残して日本語教室に参加し

¹⁶ 本調査で訪問がかなわなかった中央公民館の教室では、他の教室に比べて指導者間・学習者間の交流が盛んだそうである（茨木市教育委員会社会教育振興課藤田氏の直談による）。

ている」ことがあると述べ、人生経験の豊富さとそれによって培われた信念が指導方法を決定づけ、結果として学習者のニーズと乖離する場合があることを紹介している¹⁷。茨木市の教室は、図2、図4に示したように高年層で長期間ボランティア活動を行っている指導者に支えられている。人生経験、教室での活動経験が豊富であればこそ、個々の学習者のニーズよりもそれまでに培った指導方法が優先されてしまう恐れもある。多様な教材が目に入り、それらを手にとれる環境をつくることや、指導者同士の交流を促すことで、指導者自身のさらなる成長を促し、教室全体の質の向上にもつなげられるのではないだろうか。加えて、若者の奮起も促す必要があろう。30代から50代は、家庭、そして社会での責任・役割も多いが、20代には時間・体力面で余裕がある者も少なくなかろう。最新の知識を学び、新しい発想を持つ若者の教室参加は、教室の活性化・教育の質向上だけでなく、若者自身の異文化理解を促し、よりよい未来の社会を作り上げる構成員を育てることにもつながる。

8. まとめ

本調査から得られた結果は以下のとおりである。

- ・『みんなの日本語』、及び日本語能力試験の対策用テキストを教材として使用する率が高い。
- ・教室ごとに多少の差はあるものの、多様な教材が用意されているという状況にはなく、文型辞典も用意されていない。
- ・学習者の中には、普段の生活で日本語による発話機会が少ない人も見受けられる。
- ・男性学習者に比べ、女性学習者の教室参加目的には幅がある。
- ・指導者の年齢層は、高年層に偏っている。
- ・指導者には日本語教育に関する有資格者や教職経験者が少なくない。

教室に見られる以上の状況・特性の記述によって、必要に応じた改善と活用を促し、学習者と指導者にとって教室が今まで以上に有益な活動の場になること、そして、教室について知る人や関わろうとする人の裾野拡大につながることを願う。

¹⁷ 高崎（2002）には、日常会話ができるようになりたいという学習者に対し「読み書きはだいいで小学校の教科書が読めるぐらいではないと（困る）」という信念から、読み書き中心の授業を行い、また自身の英語学習の経験を反映して学習者には教科書の音読以外に声を出す機会を与えず、指導者の解説と模範音読を中心とした指導を行う「シニア世代のボランティア教師」の例が紹介されている。

【付記】

本稿は大阪府茨木市の「識字・日本語教室指導者研修」のための現状把握調査に基づく。アンケート調査、及び教室見学にご協力くださった指導者・学習者の皆さま、並びに総持寺いのち・愛・ゆめセンター主幹兼館長奥田昌樹氏、豊川いのち・愛・ゆめセンター主幹兼館長和田吉博氏、沢良宜いのち・愛・ゆめセンター主幹兼館長藪内新一郎氏、中央公民館館長大神正氏にお礼申し上げる。また、情報提供や各教室との連絡など、茨木市教育委員会社会教育振興課課長代理伊藤祐介氏、同課藤田徹也氏には多大なるご支援を賜った。記して感謝申し上げます。なお、文責は全て筆者にある。

【参考文献】

- 高崎三千代（2002）「ボランティア日本語教師の異文化適応と成長－シニア世代の地域ボランティアの場合－」『言語文化と日本語教育』24、お茶の水女子大学
- 中山健一（2018）「茨城県県央・県北地区における地域日本語教育にかんする実態調査（1）」『茨城キリスト教大学紀要』52
- 西口光一（2008）「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』138
- 黄师（2021）「日本社会に不慣れな外国人にとっての地域日本語教室の意義－教室学習者へのインタビュー調査を手掛かりに－」『龍谷大学教育学会紀要』20
- 文化審議会国語分科会（2018）「『日本語教育人材の養成・研修の在り方について』（報告）」
- 文化審議会国語分科会（2022）「『地域における日本語教育の在り方について』（報告）」

【参照データ】

「茨木市住民基本台帳人口」

https://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/soumu/soumu/menu/tokei/ibaraki_tokei/jinko_setai/jinko_suii.html
（2023年8月12日閲覧）

「外国籍を有している皆様を対象とした生活状況把握のためのアンケート調査結果報告書」

<https://www.city.ibaraki.osaka.jp/material/files/group/83/gaikokusekikekkahoukoku.pdf>（2023年8月20日閲覧）

「識字・日本語教室」

<https://www.city.ibaraki.osaka.jp/kikou/kyoikuiinkaikyokusoumu/syakaikyoiku/menu/shikijinihonngo/index.html>
（2023年10月23日閲覧）

茨木市「識字・日本語教室」日本語教育に関するアンケート

このアンケートは、茨木市「識字・日本語教室」における、外国人を対象にした日本語教育の現状を把握し、日本語学習者、及び指導者への適切な支援について考察するためのものです。アンケートを通じて知り得た情報は、研究以外の目的には使用しません。

ご協力いただける方は次の□にチェックを入れ、アンケートにご回答ください。なお、回答しかねる設問については、空欄のままで構いません。

☐ アンケートへの回答を研究目的で利用することに同意する。

追手門学院大学文学部

藪崎 淳子

(1) 該当するものにチェックをしてください。

性別	☐ 男性 ☐ 女性 ☐ その他
年齢	☐ 20代 ☐ 30代 ☐ 40代 ☐ 50代 ☐ 60代 ☐ 70代 ☐ 80歳以上
最終学歴	☐ 中学校 ☐ 高校 ☐ 大学 ☐ 大学院 ☐ その他（ ）
資格	☐ 日本語教育に関する資格は有していない（複数回答可） → ☐ 指導法や教具・教材について研修等で学んだ → ☐ 指導法や教具・教材について書籍等を通じて学んだ → ☐ 指導法や教具・教材について学ぶ機会はなかった ☐ 日本語教育に関する資格を有している（複数回答可） → ☐ 大学の日本語教師養成課程受講 ☐ 420時間以上の日本語教師養成研修受講 ☐ 日本語教育能力検定試験合格 ☐ 日本語教師【初任】研修修了（種別： ） ☐ 日本語教師【中堅】研修修了 ☐ 日本語教育コーディネーター（主任教員）修了 ☐ 地域日本語教育コーディネーター修了
活動場所	☐ 沢良宜 ☐ 豊川 ☐ 総持寺 ☐ 中央公民館

(2) 茨木市「識字・日本語教室」における外国人を相手とする日本語指導歴

☐1年未満 ☐1年以上2年未満 ☐2年以上5年未満 ☐5年以上

(3) 茨木市「識字・日本語教室」以外において日本語教育に従事したご経験

☐無 ☐有→次の質問にお答えください。

(3-1) 日本語教育に従事した期間 () 年

(3-2) 授業形態 グループレッスン () 年 マンツーマンレッスン () 年

(3-3) 雇用形態 ☐専任講師 ☐非常勤講師 ☐ボランティア講師

(4) ご職業

☐在職中 ☐退職

→在職中の方は現在の職業を、退職された方は以前の職業をお答えください。

☐教師 (☐小学校 ☐中学校 ☐高等学校 ☐大学・大学院 ☐その他 ())

☐会社員

☐自営業

☐主婦

☐学生

☐その他 ()

(5) 茨木市「識字・日本語教室」で指導をはじめたきっかけ (複数回答可)

☐ボランティア活動に興味があった ☐外国人との交流に興味があった

☐知り合いに誘われた ☐新しいことを始めたかった

☐時間に余裕があった ☐生きがい・やりがいのため

☐日本語教育の経験を生かしたい ☐教師の経験を生かしたい

☐日本語の運用能力を生かしたい ☐語学力を生かしたい

☐日本語教育の経験を積むため ☐有償ボランティアだから

☐その他 ()

(6) 現在指導している学習者について

性別	☐ 男性 ☐ 女性 ☐ その他
年齢	☐ 20代 ☐ 30代 ☐ 40代 ☐ 50代 ☐ 60代 ☐ 70代 ☐ 80歳以上
日本滞在歴	☐ 半年以下 ☐ 半年以上1年未満 ☐ 1年以上3年未満 ☐ 3年以上
滞在理由	☐ 就労 ☐ 留学 ☐ 結婚 ☐ 家族の就労 ☐ 家族の留学 ☐ その他 ()
日本語力	☐ N5程度 ☐ N4程度 ☐ N3程度 ☐ N2程度 ☐ N1程度 ☐ 不明
出身地	()
学習時の使用言語	☐ 日本語のみ ☐ 日本語+日本語以外の言語 ☐ 日本語以外の言語 →日本語以外の言語を使用する場合その言語 ()
学習者の参加目的 (複数回答可)	☐ 日本語力向上 ☐ 指導者との交流 ☐ 他の学習者との交流 ☐ 地域の情報収集 ☐ 趣味 ☐ その他 ()
学習者の日本語 学習の目的 (複数回答可)	☐ 生活のため ☐ 仕事のため ☐ 会社でのコミュニケーションのため ☐ 地域の人とのコミュニケーションのため ☐ キャリアアップのため ☐ 進学のため ☐ 趣味・興味 ☐ その他 ()

(7) 使用している教材について

教材名	
教材選択の理由	☐ 学習者からの希望によって ☐ 手元にあったから ☐ 使い慣れているから ☐ 周囲の人にすすめられたから ☐ その他 ()
使いやすさ	☐ 使いにくい ☐ 使いやすい →「使いにくい」理由 ()

(8) 現在行っている日本語支援について

☐満足している ☐満足していない

→「満足している」方は、どのような点に満足していますか。(複数回答可)

☐学習者との交流 ☐学習者の日本語力向上 ☐日本語教授法のスキル向上

☐他の支援者との交流 ☐有償ボランティアである

☐その他 ()

→「満足していない」方は、どのような点を改善するべきだと考えますか。(複数回答可)

☐学習者とのマッチング ☐学習者の意欲向上 ☐日本語教授法のスキル向上

☐他の支援者との交流 ☐待遇の向上 ☐施設・設備の充実

☐その他 ()

大阪府茨木市「識字・日本語教室」における日本語指導の現状と課題

(9) 今後日本語支援をしていく上で必要なことについて（複数回答可）

☐ 特にない

☐ 日本語に関する知識 ☐ 日本語教育に関する知識 ☐ 教具・教材の充実

☐ 支援者同士の交流 ☐ 学習者との学習以外の交流 ☐ 支援者同士の勉強会

☐ 専門家による研修 ☐ その他（ ）

(10) 日本語支援で困っていること・苦労していることをお書きください。

(11) 茨木市「識字・日本語教室」に関する意見・要望等を自由にお書きください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。